

第6回 藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり委員会 議事録

- 日時：令和7年6月24日（火）午前10時00分～午前11時30分
- 場所：藤枝市民会館 2階 会議室
- 委員出席者：
堂園委員長、永井委員、長野委員、金子委員、梅原委員、塚本委員、西尾委員、嵐口委員、内村委員、夏賀委員、小沼委員

1. 開会

2. 会議の公開について報告

3. 健康福祉部長あいさつ

前回の会議で、委員の皆様からいただいた貴重なご意見をもとに、計画案の修正や追加を行った。また6月13日には、市民の暮らしに関わる関係課の課長級職員を対象に、認知症介護研究・研修東京センター副センター長の永田久美子先生をお招きし、計画に必要な具体的な取組について検討する会議を開催した。本日提案する計画案は、永田先生からのご助言に加え、前回の委員の皆様のご意見を踏まえて議論を重ね、取りまとめたものとなる。本日の会議においても、「新しい認知症観」に基づくまちづくりの推進に向けて、忌憚のないご意見を賜れば幸いである。本日も活発なご議論をよろしくお願いします。

4. 委員長あいさつ

皆様の率直な声をお聞かせいただき、より良い計画にしていければと考えているので、よろしくお願いします。

5. 自己紹介

前回欠席の委員から自己紹介

6. 出席委員確認及び議事内容確認

課長：本日は11人の委員が出席している。藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり委員会規則第5条第2項の規定により、半数以上の出席を得ているため、会議の開催が成立したことを報告する。

7. 議事

（1）藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり計画（案）について

委員長：議事（1）について事務局から前回からの変更点含め、説明をお願いします。

事務局：資料2-1の計画案について、前回お示しした計画案よりボリュームが増え、一部修正、変更

もあるので説明する。

タイトルを藤枝市認知症施策推進計画（案）から条例に合わせ「藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり計画（案）」とした。

「はじめに」を追加した。基本法の施行、藤枝市の条例の施行、令和 6 年 12 月に基本計画が策定されたことを踏まえ、藤枝市の条例に基づき、認知症施策を総合的かつ計画的に推進するために、本計画を策定するということを記載した。

「はじめに」の下から 4 行目の、「希望ある認知症観」について、国では、「新しい認知症観」という言葉を使っているが、「新しい」とは何が新しいのかわかりにくいところもあると思われる、本市独自の表現として、「希望ある認知症観」として位置づけた。また、認知症の人の声を起点として、施策の立案等を行う事を、「はじめに」に追加した。

P.4 には、去年までの計画策定の過程を載せ、P.5 にワークショップの様子、グループワーク、リレートーク、トークセッションの写真も載せてある。P.6 には、前回も紹介した、中学生の感想のレポートを掲載している。

P.8 は「2－3 施策を進める上での基本方針（4 つの柱）」とした。前回までは、施策を進める上での姿勢という事で、4 つの柱としていたが、それを基本方針という言葉に言い換え、丁寧な説明を加えた。また、「希望ある認知症観」とは何かを説明している。

P.9「施策の体系図」では、前回は取組方針としていたが、何を目指すかを明確にするため、重点目標という言葉に言い換えた。また、資料 2－2 の取組方針 2「健康づくりや地域・仲間とのつながりを育む」と、取組方針 4「認知症であることや、自分の思いを安心して伝えられるよう力を活かし合う」が一部重複するところがあるため、整理した。

取組方針 1 の「認知症とともに生きることについて学び合う」は、重点目標 1「希望ある認知症観の普及と理解の深化」と表現を変えた。

2－2 の「主な取組」という表現は、「重点施策」という表現に変えた。

重点目標 2「一人ひとりの個性と力を活かした社会参加の促進」で、前回意見があったバリアフリーの促進や、介護しながら働き続けられる環境整備の促進などを、重点施策としてあげてある。

P.10 からそれぞれの重点目標の詳しい説明になっている。

最初に「認知症の人の声からみた現状と課題」を追加している。今までワークショップなど、さまざまな機会を通して挙げられた本人の声から課題をまとめた。

6 月 13 日に庁内で会議を行い、各課で取り組めることや、地域包括ケア推進課とできることとして挙げた意見をまとめ、P.11 に「主な取組」として加えた。

成果指標に、現状値と目標値を追加した。重点目標 2 の指標「認知症の人や家族の声をもとにバリアフリー化に向けた検討や取組を行った回数」や「家族等の声をもとに仕事と介護の両立について検討した回数」のように、これから取り組む指標のため、現状値が出せないものもある。

アウトプット指標とは、何をどれだけやったかという指標。アウトカム指標とは、目標に対してどのような結果が出たかという指標でアンケート調査などで出す必要がある。

後半に、SDG s 関係、今までの藤枝市の認知症施策の歩み、国の動向、藤枝市の条例、委員会

規則などの資料を載せている。

資料 3 が重点目標ごとに抜き出したアウトカム指標だが、現時点でアンケート調査を行っていないため、数値が出せていない。

介護保険事業計画である「ふじえだ介護・福祉ぷらん 21」が 3 年毎に、見直し、更新されており、今年度、第 10 次の策定に向けて、アンケート調査を行う予定である。このアンケートの中に、認知症の計画のアウトカム指標を入れ、評価のひとつとして加えたいと考えている。

委員長：前回の委員会の意見をどのように反映したかは、資料 1 を確認いただきたい。

成果指標だが、重点目標 2 『一人ひとりの個性と力を活かした社会参加の促進』を実現できていると思う人の割合を聞いた時に、本当に社会参加の促進が来ているのかは判断しきれない難しさがあると思う。ここまでのところで委員の皆様にご意見伺いたい。

委員：アウトプット、アウトカムという言葉の意味を分からない人もいると思うため、表現を変えるか、表現を変えないのであれば注釈を加える方が良いと思う。

事務局：表現を変える方法か説明を加える形で対応をしていく。

委員：P.11 のアウトプット指標『会議や検討会、講演会等に参画した認知症の人の数』『認知症とともに生きることにについて学び合った回数と人数』について、具体的にどのような機会のことを示しているのか。また、アンケートの言葉やどのようにアンケートの数値を拾うのかをこの会議で決めるのか。

事務局：『会議や検討会、講演会等に参画した認知症の人の数』は、R6 年度に、認知症の人が認知症とともに生きる共創のまちづくり委員会や出前講座に参画した人数をカウントしている。『認知症とともに生きることにについて学び合った回数と人数』は、ワークショップやオレンジランプ上映会等の回数や参加人数を示している。

アウトプット指標については、基本的に市で行った講座等をカウントすることを想定している。アウトカム指標はアンケートでないと数値が出ないため、アンケートをとる予定。

質問の内容や文言は今回の審議事項ではなく、今後確認をさせていただく。

委員長：アウトカム指標が重点目標の達成目標として適しているか、またアウトプット指標がアウトカム指標に結びつくものであるのかの確認は必要であると思われる。

アウトカム指標の出し方は、アウトプット指標で掲げられているような学び合いの機会に参加した人にアンケートをとるのか。

事務局：アウトカム指標は、3 年に 1 度ふじえだ介護・福祉ぷらん 21 の計画策定時に市民 2000 人以上を対象にアンケートをとるため、そこで数値をだす。個別事業の組み立てをする際には、さまざまな学び合いの機会等で集めたアンケートを参考にさせていただくこともあると思う。

委員長：アウトプット指標で示されている学び合い等に参加した人と、アウトカム指標の値を出すために取るアンケートの対象者が大きく異なると、取組によってどのような成果が出たのか結びつきづらくなると考えられる。そのため、ふじえだ介護・福祉ぷらん 21 に加えて実際に学び合い等に参加している人にも、アンケートを取るなどの検討が必要だと思う。

委員：重点目標 2 のアウトプット指標について、主な取組に対してどのような結果が出たかを示すものだと思うが、主な取組は具体的な記載がされているのに対し、成果指標は具体的な記載がされていないと思う。具体的に成果指標を挙げる方が良いのではないか。

事務局：重点目標２についての取組が各課から出てきており、幅広い分野に渡るため、包含して成果指標に記載しているが、今一度事務局で検討する。

委員：市民全体に共通理解を図るためにも、市が誰を対象に何をどのくらい行い、どのような成果が出たのか、市民に伝わるような表現にする必要があると思う。今のままだと、どのような効果があったのかが分かりづらいと感じた。重点目標１の重点施策に『条例の考え方の普及・啓発』と記載されているが、成果指標にはそれを測るものが無いため、重点施策や主な取組とアウトプット指標が連動している方が分かりやすいように感じた。

事務局：アウトプット指標とアウトカム指標をどのように連動させていくかは課題であると感じている。重点目標１と重点目標３のアウトプット指標は現時点でも行っている取組から数値を出せるものになっている。一方、重点目標２のアウトプット指標は、現時点では取組がされておらず、数値が出せないものであるが、今後新たな取組をしていく中で、数値を位置付けていく。アウトプット指標に関しては、全て網羅的に数値を把握することは現実的に困難な面もあるため、集計しやすさも含めて検討した。アウトカム指標は、市民の暮らしやすさを測れる指標にできたらと思っている。

委員長：委員から出た意見は、施策とアウトプット指標の繋がりが分かるようになれば良いというものだったと思う。ただ、限られたマンパワーで、数値を把握するためには工夫が必要であると思われる。例えば、重点目標１『会議や検討会、講演会等に参画した認知症の人の数』でその会議や検討会や講演会は何を示しているのか等を示す形で整理する必要があるのかと思われる。

委員：P.13のアウトカム指標『認知症の人が外出や買い物、地域活動などの自分のやりたいことを実現できていると思う人の割合』について、認知症の人をどのように抽出していくのか。

事務局：ここでは市民に対して、認知症の人が自分のやりたいことを実現できていると思うか思わないのかを問う質問として示している。

委員：具体的な数字を出すとすると、既存の取組に対してどのような成果が出ているかを示す方が集計しやすいと思う。例えば、地域で認知症の人を見守る人の人数や夜間外出したまま行方不明になることに備えた工夫等を、アウトプット指標やアウトカム指標でより具体的に示した方が良いのではないか。認知症の人の目線からだと、施錠の促しやSOSネットワーク等は管理されているような印象を受けるかもしれないが、市民全体の目標として掲げていれば、そのような指標も良いのではないか。

委員長：今の意見は、アウトプット指標やアウトカム指標を、既存のデータを使って測る可能性が無いのかということだった。

事務局：今お話があったご意見について、今後安全な外出の継続に向けて認知症の人や家族を含め、市と警察で話し合いをして検討していくことが、P.13のアウトプット指標『認知症の人や家族の声をもとにバリアフリー化に向けた検討や取組を行った回数』に含まれると考えている。それぞれの指標がどのような取組を含むのか分かりにくいという意見が出たため、共通理解を図れるよう整理をし、お示ししたいと考えている。

アウトプット指標は客観的なデータをもとに評価をし、アウトカム指標に関しては、市民の実感をアンケートで回答してもらうことを想定している。アウトカム指標に関しては、重点目標をどのくらい達成できているかを測るバロメーターとなる。資料３アウトカム指標は、重点目

標を達成するために数値化できるものを挙げた。

委員長：地域のウェルビーイングの指標を国が作っているが、主観的なウェルビーイングと客観的なウェルビーイングのデータがあり、それぞれでズレがある。そのため、はじめは主観的な指標も良いが、取組を進めていく中で、既存の客観的データに変えていくことが柔軟に出来るような枠組みがあると良いと思った。

委員：P.13 アウトカム指標の『認知症の人が外出や買い物、地域活動などの自分のやりたいことを実現できていると思う人の割合』について、認知症ではない人から見て実現できているかと、認知症の人や家族から見て実現できているかが乖離したときに、本当に認知症の人にとって住みやすいまちになっているのか、アンケートでの評価に難しさがあるが、今後考えていく必要があると思う。

委員長：市民全体にアンケートをとったときに、認知症の人や家族の思いが薄まってしまう可能性が考えられるとのことだった。

ふじえだ介護・福祉ぷらん 21 は、65 歳以上の市民にアンケートをとるのか。

事務局：65 歳以上の市民から無作為抽出する。2 号被保険者へのアンケートの実施については、担当課で検討中である。アンケート対象別に結果を見る事は可能なため、分析はできる。市民アンケート等を活用することも可能である。また、5 カ年計画であるため、今回のアンケートのとり方で不具合がある場合は、より効果が分かるような指標となるように検討も可能である。

委員：目標値の基準はどのように出しているのか。

事務局：現状値をもとに計算して出した。

委員：5 年間の間で、目標値とのズレが生じた場合、中間見直し等はするのか。

事務局：目標値は、5 年間変更はしないが、中間見直しの時点で達成できない場合はなぜ達成できないのか、達成できた場合は今後どのように進めていくか、委員の皆様と議論をして検討していく。

委員長：アウトプット指標やアウトカム指標は、今後どのように決定していくのか。

事務局：修正をかけるべきものは修正し、委員の皆様にはパブリックコメントの時期に意見を頂けたらと思う。

委員：研修なども大切であると思うが、実際に認知症の人と関わる機会が、市民の人達にも認知症の人のことを理解してもらうために大切であると思う。

委員長：認知症の人と一緒に活動している市民の人も、計画を読んだ時に自分の活動がこのように全体に結び付いているのかとイメージできると良い計画になるのではないと思う。

委員：重点目標 3 のアウトプット指標『意思決定支援について学び合った回数と人数』は、支援者側が本人の意思を尊重しながら本人が希望をもって生きられるように、マネジメントや支援の現場で実践していくことの基礎となる学び合いをする、ということを示していると思うが、それが5 年間で3 回という数値目標で実現できるのかと不安に感じる。所属団体ごとにも学び合う機会を設けることもできると思う。

事務局：ご意見を踏まえどのくらい実現可能かも含めて再度検討を進めていく。

委員長：実現可能性と、目標を達成するために十分なのかという視点も重要だと思う。アウトプット指標で何をカウントするのかを明確化することで、既に実施している取組でカウントできるも

のがあるのではないかと気づくことにも繋がると思う。

委員：重点目標１の重点施策２『学び合いの機会の創出』については、以前中学生や高校生の意見を聞いても、大人が考える認知症の理解と、若い人の視点は異なるように感じた。今高校生くらいの人達もあと１０年したら社会で活躍していくと思うので、若い世代の理解が深まるように取り組んでもらいたい。認知症のことを理解するのは、頭ではわかっているけど時間がかかることだと思うので、若い人達が認知症の人と触れ合う機会を設けたり学び合いをしてもらう事で、認知症への理解が深まり、認知症があたりまえになると良いと思う。

委員長：P.14 取組の方針４～５行目で『認知症の人が自分の思いを伝えることが難しくなってからも、尊厳や思いが尊重される体制づくりを進めていきます』と記載されているが、P.15 のアウトカム指標では『自分が認知症になったとき、身近な人に気持ちを伝えられると思う人の割合』となっており、思いを伝えられることが前提にある。思いを伝えられなくなった時もその人の尊厳を尊重することが大切にされているため、これが測れるようなアウトカム指標があると良いと思う。他に意見が無いようであれば、議事としてはこれで終了とする。

事務局：次回の委員会について日程調整をさせていただく。

⇒第７回委員会 日時：令和７年１０月９日（木）１０：００～

場所：未定（生涯学習センターまたは市役所会議室）